QBS 九州大学ビジネス・スクール
Kyushu University Business School

第5回 MBA成長戦略フォーラム
2022.3.6[sun]

主催／九州大学ビジネス・スクール学生会
協賛／株式会社みぞえ、株式会社タカギ
後援／一般社団法人QBSアラムナイネットワーク(QAN)
九州大学ビジネス・スクール

第５回 MBA 成長戦略フォーラム
《プログラム》

※プログラムの時間は前後する場合がございます。

スケジュール	タイトル・発表者	頁
12:30～	受付開始	
13:00～13:10	開会挨拶　髙田　仁　氏（九州大学大学院経済学府 産業マネジメント専攻 専攻長）	
13:10～14:50	【第 1 部】研究成果発表	
	障害者の雇用促進におけるテレワーク活用の有用性の検証と提言 **―精神障害者及び発達障害者の働き方向上を目指して―** 佐藤　愛桔　氏	7
	管理栄養士による健康な女性への食事指導ビジネス提案 **―ハラサポ―** 原　　美咲　氏	9
	ミュージアムを中核とする地域活性化について **―「ミュージアム・コーディネーター」試案―** 三角　徳子　氏	10
	日本国内りんご農業の生産性向上に関する考察 山内　龍次　氏	11
	休　憩（約15分）	
15:05～15:21	【第 2 部】QBSの学びと活動報告 ～ビジネスプランコンテストへの挑戦～	
	中小企業向け幹部人材マッチングアプリ『右腕』 神谷　　誠　氏	15
	シェアリングエコノミーサービスの総合プラットフォーム事業『Share Pick!』 鬼﨑　美緒　氏	15
	休　憩（約20分）	
15:40～16:40	【第 3 部】パネルディスカッション	
	テーマ：**不確実性の高い時代をSurviveするために** ≪パネリスト≫ 1. 杉本　将隆　氏（株式会社電通コンサルティング　専務執行役員　QBS6期生） 2. 福嶋　真一　氏（日本交通産業株式会社　代表取締役　QBS9期生） 3. 深山　　治　氏（リーガレックス合同会社代表　QBS15期生） ≪ファシリテーター≫ 五十嵐　伸吾 氏（九州大学ビジネス･スクール教授、QREC副センター長）	
16:40～16:50	閉会挨拶　学生会事務局　代表	

MBA 成長戦略フォーラムに寄せて

九州大学大学院経済学府
産業マネジメント専攻
専攻長　**髙田　　仁**

本フォーラムは、九州大学ビジネス・スクール（QBS）のひとつの目玉科目とも呼べる「プロジェクト演習」において、学生が執筆した論文の内容について、一般の方々にもその一端に触れて頂くことを目的として開催されるものです。

QBS の「プロジェクト演習」は、大多数の QBS 生が 2 年次に選択履修する科目です。特定のゼミに所属し、通年（前期＋後期）をかけて自らの問題意識や職場が抱える具体的課題と向き合い、独自の問いを立て、QBS での多様な科目履修を通じて獲得した知識を統合し、自分なりのアウトプットを導き出すという一連のプロセスに大きな意味があります。つまり、決して一方的な知識獲得のみに偏らず、得た知識を自身の血肉へと昇華させるのです。

QBS は、設立以来「MOT」及び「アジア・ビジネス」に力点を置いてきましたが、2015年度からは「新たな事業創造力の不足」に果敢に挑戦する人材の育成にも力を入れてきました。学生が執筆するプロジェクト論文には、「新たな事業価値の創造」に関わるテーマも少なくなく、不確実で先の読めない事業環境下で新たな価値創造に邁進する学生たちを見て、こちらも勇気づけられる思いです。

加えて、2022年度からは、新たに DBEX（Design, Business & Entrepreneurship Crossing Track）と称するデザインやアントレプレナーシップ領域との融合基盤をもつ専修トラックを、本学芸術工学府および QREC（ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター）との連携によりスタートさせます。これによって、多様な専門バックグラウンドを持つ人材の連携によって、新たな価値創造をリードする人材の輩出を加速させて参ります。

本フォーラムを通じて、QBS が目指す教育活動の一端をご覧頂き、忌憚のないご意見や感想を頂戴できますと幸いです。

第５回 MBA 成長戦略フォーラムにあたって

一般社団法人ＱＢＳアラムナイネットワーク（ＱＡＮ）
代表理事　**寺松　一寿**（**4期生／寺松商店**）

「第５回 MBA 成長戦略フォーラム」の開催、心よりお喜び申し上げます。

まずは感染症対策を施しながら本日を迎えられました現役生の皆様に QAN を代表して最大限の賛辞の言葉をお贈りしたいと思います。在学時に得られた知識、知恵、経験そしてネットワークは、修了を迎えられる皆様の人生を構成する大事なパートを占めると思いますし、核なる部分の一つになって欲しいと思っています。

当たり前と思われていた事が次々と剥落し転換を余儀なくされる時代。事案を分析し、予測し、仮説を立て、検証していく。かかる一連の考察のプロセスが益々重要になってきている感がします。前例のない問題に対して、自らの解を如何に求めるのか、それにはきっと QBS で得た多くのことが役に立つはずです。私から皆様に本当にお伝えしたいことは例年と何ら変わりません。繰り返しになりますが、大事なことは何度でも、と思っておりますので、失礼ながら以下、例年の寄稿文を引用させて下さい。

『MBA が学位に過ぎずその評価は実社会での活躍次第である事は言うまでもありません。事実各界で活躍されておられる修了生や関係者は多くおられます。MBA は実社会でも有用ですが注意も必要です。理屈ではその通りでも、人には心がある分、思う通りには参りませんし、世の中には予測不可能でコントロールできない不確実なもので溢れています。

私感ですが、真の MBA ホルダーになるには、理論と実践の乖離を埋める必要、言い換えれば各々にとって最後のワンピースを見つける必要があろうと思っています。その方法論はそれぞれでしょうが、本物へと昇華させていく過程が必要であると考えています。

QBS は港であり、QAN はそこにあるパブのようなもの、と私は良く表現しています。時には予期せぬ荒波に揉まれることもあるでしょう。そんなときは是非港に寄港して頂きたいと思っています。パブではお酒も楽しめますが多くの仲間もいます。信頼できる多くの確かなものがあります。我々は、奮闘される皆様と常に一緒にいることを心の片隅に留めて頂き、臆することなく、大海原を航海して頂きたいと思います。』

新型コロナウィルスへの対応が長期化し先行きが不透明な時代に、かかる前向きなイベントを開催することは大きな意義があります。人は希望がなければ前に進めないものです。暗い世相に各々が考え抜いた希望の灯を掲げ一隅を照らす事が何よりも大事だと思っています。

本日は皆様の御活躍及び研究成果を拝聴するのを楽しみにしています。

学生会からの挨拶
～私たちがなぜ今、QBS で学んでいるのか？～

九州大学ビジネス・スクール19期学生会
会長　**鬼﨑　美緒**

本日は第５回 MBA 成長戦略フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。開催に向けてご協力いただきました、すべての方々に学生会を代表して心より御礼申し上げます。

さて、本フォーラムは QBS での学びの集大成であるプロジェクト論文について、在校生自らがご家族・ご友人・そしてこれから QBS を志す方々に向けて、発表させていただくことを大きな意義としております。また今回は QBS 卒業後、多方面で活躍されていらっしゃる先輩方にご協力いただき、パネルディスカッションも企画いたしました。とても刺激溢れる時間になることかと思います。これに先立ちまして、「私たちがなぜ今、QBS で学んでいるのか？」について触れさせていただきたいと思います。

私たちは異なるバックボーンと目的意識を持っており、一見すると共通項がないように見えるかもしれません。ただはっきりとした共通項が2点あります。一つは「現状への問題意識が強いこと」です。私たちは自分自身や、所属する組織、そして日本・世界の現状に対して、果たしてこのままでいいのだろうか？という疑問や秘めたる思いを持っています。

そしてもう一つが「成長意欲が強いこと」です。仕事に取り組みながら、大学院生として勉学に励むことはそう簡単なことではありません。よく、なんでそんなことをしているの？と聞かれることもありますが、私はこう答えています。「学ぶことが好きで、学びを通して成長したいからだ」と。QBS 生にはこの2つが備わっていると日々感じています。

ではなぜコロナ渦で先行きが見えない今、国内 MBA である QBS で学ぶのか？についてですが、意外にも「むしろ今だからこそ挑戦できたと思う」と答える人が多いのです。オンライン授業やテレワークが一般的になり、うまくタイムマネジメントをして時間を捻出し、MBA で学ぶ人が増えています。コロナに屈しない、人生における最高の時間の使い方だと言えるのではないでしょうか？

しかし、「MBA そのものに意味はない、そんなものは個人的に書籍や実地で学べばいいのだ」と言う人もいるでしょう。それもまた間違いではないかもしれません。ただ2年間という限られた時間の中で、多様性を持った人間が寄り集まり、学んだことをお互いに確認し合い、時には議論をぶつけ合う過程は純粋に面白いものです。そしてさらに面白いことに、1人で学んでいては辿り着けなかったかもしれない、新しい発見や化学変化が日々起こるのです！私はこのことを体感するようになって、自分が QBS で学ぶことの意義に確信が持てるようになりました。

今日の発表は、この様々な化学変化を経たであろう QBS 生としての集大成のお披露目の場です。ぜひ一緒に学びの楽しさを感じ、ワクワクしていただけると幸いです！

プロジェクト論文　要旨

障害者の雇用促進におけるテレワーク活用の有用性の検証と提言
―精神障害者及び発達障害者の働き方向上を目指して―

氏　　名　佐藤　愛桔
担当教員　松永　正樹

人口急減及び超高齢化社会が進む日本において、労働力不足は長年の課題である。この課題に対し、内閣府は日本経済をより強化していくためにも、多様性を意識した雇用が重要だとしている。障害者の雇用促進もそのひとつである。

2019年12月以降、COVID-19の影響により、テレワークという新たなワークスタイルが浸透しはじめた。これは障害者雇用の促進が益々求められる中で、前向きな選択肢であることが考えられた。特に、離職率の高さや法定雇用率のカウントに必要な就労時間に達していないなどの様々な課題により、他の障害よりも雇用が進んでいない精神・発達障害者にとって、テレワークが有用な働き方の選択肢になり得るのか調査を行った。

まず、先行研究やインタビュー調査により、精神・発達障害者にとってテレワークやオンライン授業の活用が、対人恐怖などに伴う対人ストレスの緩和につながる可能性や通勤通学に伴う移動ストレスの緩和につながることが示唆された。また、上司や同僚からのサポート体制や業務が明確に示されていることも、テレワークを遂行する上では重要であると予想された。しかし、これらのストレスやサポート体制が精神・発達障害者にとって離職意向や法定雇用率に関する就労時間にどのような影響を与えるのかについては、殆ど研究がなされていなかった。

そこで、筆者は先行研究を基に、３つのストレス（対人ストレス・移動ストレス・在宅勤務ストレス）と上司・同僚からのサポート体制及び業務の明確さが離職意向や法定雇用率に関する就労時間にどのような影響を与えているのかについて調べるため、10個の仮説を立てた。そして、精神障害あるいは発達障害のある有職者を対象に499名の方へインターネット上でのアンケート調査を行った。その結果、1つの仮説が支持、４つの仮説が部分的に支持、残りは棄却となった。

精神・発達障害者の中でも対人ストレスを感じやすい人や通勤などに伴う移動ストレスを感じやすい人がテレワークを実施することで、離職意向の低減に有用であることが示された。また、これらのストレスについては、上司からのサポート体制があることで、よりストレスの緩和につながることも認められた。つまり、テレワークを活かして、業務のパフォーマンスの向上につなげられるか否かは、上司との関係性が鍵になることがわかった。

その一方で、本研究では、精神・発達障害者が在宅勤務に伴うストレスが高い人ほど離職意向が高くなる結果も示された。前述に示したものとは反対に、テレワークという働き方が向いていない人もいるため、今後、緊急事態宣言が再度命じられた場合や完全在宅勤務を前提とした採用を積極的に行っていくとなった場合、在宅勤務に伴うストレスが高い人への対応が課題となるであろう。また、この在宅勤務ストレスの緩和は、非常に難しいことが今回の研究でわかっている。まず、在宅勤務ストレ

スが高く、かつ、上司から肯定的なメッセージを示されているほど離職意向が高くなる傾向が示された。また、テレワークを実施しており、かつ、業務を明確にしている場合にも、かえって在宅勤務ストレスが高くなることが認められたのだ。この課題を解決するためには、様々な観点から検討を行う必要があるが、今回の研究結果からは同僚との活発なコミュニケーションがひとつ鍵となる可能性が示唆された。

また、本研究では、法定雇用率に関する就労時間との関係性は棄却される結果となった。理由は、回答者の属性が偏っていたことによる、統計学上の天井効果が働いたからであると考える。よって、次回の研究の課題としたい。

以上により、精神・発達障害者にとって、テレワークという働き方には向き不向きがあるものの、柔軟な働き方が設けられていることは有用であった。これは、離職率の課題解決だけでなく、全国より優秀な人材を雇用する可能性が生まれることを示唆している。また、超少子高齢化社会である日本において、精神・発達障害者が柔軟な働き方によって今まで抱えていた出社時のストレスを軽減し、自身の力をより発揮できるようになるのであれば、企業においても真の即戦力となる可能性を秘めている。そして、柔軟な働き方は障害者・健常者問わず有用であり、社員の満足度及び業務のパフォーマンスの向上にも寄与する可能性があるのだ。

管理栄養士による健康な女性への食事指導ビジネス提案

―ハラサポ―

氏　　名　**原　　美咲**
担当教員　**目代　武史**

「人生100年時代」が宣言され、健康寿命の延伸のための取り組みが行われている。管理栄養士の国家資格を保有している筆者は大学卒業後、健康な人への食事指導をするためにフィットネス業界に進んだ。トレーニングの成果を発揮するには食事が必要不可欠であるため、「フィットネス業界では管理栄養士が必要とされる」と希望を持って社会人になった。しかし、管理栄養士は仕事が少ないのが現実だった。社会に出ると、「管理栄養士は社会的地位が低い」とよく耳にした。そこで、第1章、第2節では管理栄養士の現状がどうなっているのかを調査するために、管理栄養士の歴史、管理栄養士養成制度、現役の管理栄養士へのインタビュー、アンケート、大学時代の恩師と母校の就職支援担当者にインタビューを行なった。その結果、管理栄養士を目指す学生は目標がないままなんとなく入学していることがわかった。また、栄養士が過去3度も廃止になりかけた歴史や、これまでの管理栄養士養成校は新たな価値を提案し社会を変革する人材の教育に力を注げていないこともわかった。そこで、管理栄養士の社会的地位向上のためと、筆者のミッションである食を通じて世界に幸せを届けることを実現するために、本研究で新たなビジネスモデルを創出し社会に食の大切さを発信していくことを考えた。

第２章以降はビジネスモデルを提案した。筆者のこれまでの経験を活かし、フィットネスジムで行う「しっかり食べて痩せる管理栄養士の食事指導サービス“ハラサポ”」を提案する。フィットネスジムのトレーナーが行う食事指導を、ハラサポにアウトソーシングするビジネスである。ハラサポの食事指導には、独自開発をしているアプリを使用する。食事の写真でカロリー計算をする機能や人工知能で返事やアドバイスをする機能の搭載検討し、人間の負担を減らし低価格で多くのユーザーを獲得することを考えた。2021年1月から2021年12月にかけてアプリ開発、アプリを用いたハラサポ食事指導の実証実験、ユーザーヒアリングを20名のクライアントに繰り返し実践してきた。ユーザーヒアリングに加えて、ヘルスケア産業市場調査、食事管理や指導の競合調査、リーンキャンバス、ペルソナ、エンパシーマップ、カスタマージャーニーマップの作成などを通じ、ハラサポが持つ圧倒的な優位性を検討してきた。1年間の活動を経てハラサポでは大きな発見をし、アプリ開発の目的をピボットした。2021年の１年間でハラサポはプロブレム・ソリューション・フィットまで到達した。2022年は、プロダクト・マーケット・フィットを目指すフェーズである。そのためには、アプリ開発の資金やユーザー数の拡大、マーケティング戦略が必要である。そこで、ここまで共にハラサポを作り上げてきたQBS 同期の一人と共に株式会社ハラサポを2022年2月に創業することを決意した。

本研究を通じて、これからは定量評価を取り入れるべきだとわかった。2022年は定性的な発見と定量的な証明を同時に取り入れ、プロダクト・マーケット・フィットを目指していく。

ミュージアムを中核とする地域活性化について

―「ミュージアム・コーディネーター」試案―

氏　　名　**三角　徳子**
担当教員　**村藤　　功**

従来、博物館等のミュージアムにおいては、文化財の収集・保存・研究・展示といったシーズオリエンテッドな活動が主要なものとされてきた。一方、ミュージアムは社会教育機関でもあり、近年は生涯学習支援や教育普及活動のようなニーズオリエンテッドな活動も積極的に展開されるようになってきた。そうした、一見相反するモーメントのもと、行財政改革の一環として指定管理者制度の導入等が進み、いささか俗世から隔絶した感さえあったミュージアムでも、サブカルチャー関連の特別展を通じて来館者獲得に躍起になるなど、新たな動きが生じている。さらに、文化庁の新ガイドラインでは、地域貢献や新技術実装といった新たな取り組みが求められ、近い将来の施行がほぼ確実視される学芸員制度改革とも相俟って、ミュージアムはいま、激動の時代に差し掛かっている。だが、生存戦略の目玉として打ちだされたところの世界遺産や日本遺産を巡るヘリテージツーリズムも、新型コロナ感染拡大の直撃を受けて画餅に帰しかねない状況である。そうした苦境におかれたミュージアムが、地域文化の“目利き”として、未開拓ないし低開発に留まっていた文化的資源を発掘・選定し、今日的な社会ニーズに添う形で高付加価値化し、自らの持続的発展と地域振興に貢献する方策として、「ミュージアム・コーディネーター」なる新たな専門職を構想した。本論文は、ミュージアムの現状分析に立ってその必然性を導出し、実際の地方都市のケーススタディを通じてその在り方を検討したものである。概略は次の通りである。

第１章にて、ミュージアムと文化財について、それぞれ基本事項を整理し、その過去、現在を展観したうえで、文化庁の動向等を概括した（なお、その背景に、筆者が従事する福岡市博物館での教育普及事業があることを念のため付記する）。

第２章では、北部九州の歴史系施設と遺跡、具体的には大分県中津市の中津市博物館と中津城、長崎県松浦市鷹島の松浦市埋蔵文化財センターと水中考古学研究センター等、ならびに佐賀県小城市・土生遺跡公園と神埼市・王仁博士顕彰公園、多久市・多久聖廟等に焦点を当て、実地視察したうえで、地域文化財とミュージアムとの関連について概観し、若干の考察を行った。

第３章では、新たな専門職「ミュージアム・コーディネーター」について、ニーズ把握の重要性に立つ職能と活動イメージの試論を述べ、ミュージアムと文化財を地域振興に活用する方策を検討した。

第４章では、実際の地方都市すなわち熊本県八代市のケーススタディを中心に据えた。ユネスコ無形文化遺産に登録された妙見祭を巡り、文献調査と、関係者ヒアリングを含むフィールドワークを行ったうえで、地域文化財等に焦点を当て、さらにスピンオフ的な展開も視野にいれつつ、仮想的ではあるが一定程度の現実味も備えた地域振興プランを構想し、文化庁助成事業「地域と共働した博物館創造活動支援事業」への応募書類のシミュレーションの形をとりつつ、具体的に論述した。

日本国内りんご農業の生産性向上に関する考察

氏　　名　**山内　龍次**
担当教員　**髙田　　仁**

本論文は、日本国内（以下、国内と呼ぶ）りんご農業の継続・発展に貢献する事業アイデアの検討にあたり、国内りんご農業の課題として、高品質ではあるが手作業中心の為に労働集約的で生産性が低いという点に着目し、ローテクノロジー（以下、ローテクと呼ぶ）による労働効率化でも生産性を向上できる可能性があるという仮説の基、生産性向上策について検討・考察したものである。

ここで生産性は、Output(生産量 or 付加価値額)/Input（労働・資本・原材料等）と捉える事ができ、その向上には労働効率化、資本効率化、原材料等効率化、生産量向上、付加価値向上が必要である。またローテクとは、ある程度一般的になった技術で、シンプルで低価格な製品やサービスを構成できるものとする。

国内りんご生産量は世界総生産量の0.8% と多くはないものの、輸入果実の大幅増加の中でも継続的に高い国内需要を保ち、また綺麗な色づきで甘い高品質なりんごとして台湾・香港を中心に海外でのニーズも高い。一方で、その高品質さは労働生産性を犠牲にして手間をかけることにより実現されており、労働生産性の低さが課題とされる国内農業にあって、一段と労働時間が長く、労働集約的な構造であり、平均的な労働者の2倍以上長い時間働き収入は6割程度という状況である。

りんご農業の機械化・ICT 導入が進んでいるアメリカ合衆国の事例や国内農業一般に関する検討から、栽培面積40 ha 等の大規模化によって、資本効率化すると共に機械化・ICT 導入による労働効率化も進みやすく、生産性が大きく向上することが分かっている。

また国内りんご農業の現状分析から、生産量を多くできる栽培方法の普及、国内外需要に対応する成長営農への転換、6次産業化などフードバリューチェーン構築なども生産性向上に有効であり、推進の動きがある。そして10～20 ha と比較的大規模な農園を持つ先進的な農家は、総合的な生産性向上取組の基、機械化・ICT 導入による労働効率化を推進している状況である。

しかし国内りんご農家は、その3/4が1 ha 未満の栽培面積と小規模であり、また日本の天候・地形から、天候リスクで大規模化が難しく、中山間地の立地で機械導入が難しい。そして高齢化で ICT リテラシーも不足している。そこでこうした多くの一般的な小規模農家に寄り添った生産性向上手段を創出したいという思いから、ユーザー中心の考え方で課題解決のアイデアを実現するデザイン思考を応用した検討を行った。

公開資料による情報収集や、本人も意識していない感情や考えを引き出す為のライフマップを用いたインタビュー調査、小規模りんご農家の子息である検討メンバーの内観により、ユーザーへの共感と理解に取り組み、高品質なりんごを生産し続ける為に肉体的にも心理的にも負担が大きい摘花・袋掛け作業の負担軽減という課題を見出した。ユーザーの気持ちに着目したブレインストーミングでのアイデア創出から、ローテクでない汎用的な愛着が持てるパートナーロボットでリモートや半自動で様々な作業を代行し手助けしてくれるものと、ローテクで摘花・袋掛けを効率化できる便利道具というアイデアを抽出し、プロトタイプ作成を行った。プロトタイプは素早く低コストで実現したい事を直観的に伝える事のできる程度の簡単な物とし、パートナーロボットは段ボールで、摘花・袋掛けのローテク便利道具は百円均一ショップで購入した物を素材に、それぞれモックアップ（イメージを伝

えるための模型）を作成して、ユーザーへの仮説検証を行った。

ユーザーにプロトタイプを見せてフィードバックを得たところ、パートナーロボットは、汎用的である点では良い評価を得られたものの、出せる金額としては500万円程度との反応であった。また外見には拘りがなく愛着はそこまで必要ないという意見であった。一方、ローテクによる摘花・袋掛けの便利道具はぜひ欲しいという高評価であり、詳細な改善点や新たなアイデアなどのフィードバックが得られた。

国内リンゴ農家には、機能ごとの機械がそれぞれに高額な事から、汎用的なロボットへの期待がある事は分かったが、やはりハイテクで高価なものは効果と価格が折り合わず導入・普及には時間がかかる。他方でローテクを活用した便利道具による労働効率化で小規模りんご農家の生産性を向上できる可能性は十分にありそうな事がわかった。またこれらはデザイン思考を用いて導出されたものであり、ユーザー中心の考えで素早く着想・発案・実行を回し、発散と収束・分析と綜合の繰り返しでイノベーションアイデアを実現する、その手法の有効性も一定程度確認できた。

ローテク便利道具のコンセプトが正しい事は確認ができたが、実際に効力があるプロトタイプの制作や実証実験は未実施であり、本格的な開発の為のリソースの獲得もできていない。さらなるブラッシュアップを行い、１年単位の収穫のサイクルを意識して実証し、小規模りんご農家の生産性向上のファーストステップとして実現が望まれる。

またデザイン思考の実践では、常にユーザーを中心にしながら、アイデアを多数出し発散させ、抽出しその理由について議論する、また一緒に手を動かしメンバー全員の知恵やアイデアを持ち寄り新たな何かを創造する、といった事を促し実践できる「環境」や「チーム」が重要である。

QBS の学びと活動報告

ビジネスプランコンテストへの挑戦

QBS ビジネスプランコンテスト2021大賞

中小企業向け幹部人材マッチングアプリ『右腕』

代表者　**神谷　誠**
事業メンバー　**堀内　孝治、森　聡之、吉田　旭**

中小企業では経営者の右腕となるような幹部人材が不足している。会社の強みを伸ばし、弱みを補うことのできる優秀な幹部人材がいない。副業・兼業を活用し、全国から優秀な人材を九州の中小企業にマッチングさせることで地方創生に貢献する。中小企業の経営課題解決型のサイト・アプリを構築し、中小企業の活性化と個人のキャリアアップを実現する。

第21回九州・大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテスト
優秀賞・企業協賛賞（ストライク賞）受賞

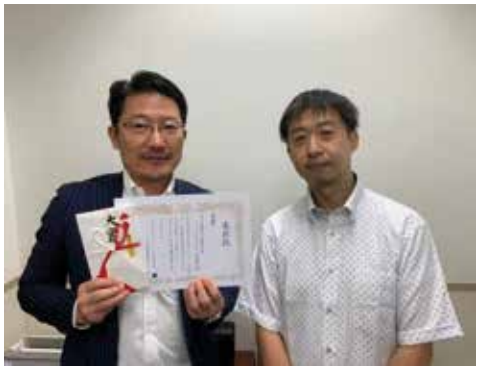
シェアリングエコノミーサービスの総合プラットフォーム事業「Share Pick!」

代表者　**鬼﨑　美緒**
事業メンバー　**青谷　凪紗、河野　高広、前原　可林、吉田　旭**

「Share Pick!」は、メインターゲットを忙しいビジネスパーソンとし、無料版と月額360円の有料版の二段階設定で、スマートで使いやすいシェアリングエコノミーサービス（以下、シェアエコ）の総合サイト＆アプリを提供する総合プラットフォーム事業である。またサービス認知向上などに課題を持つシェアエコ事業者のために、顧客情報収集・分析を踏まえたコンサルタント事業もあわせて展開する。メインビジョンは「シェアをもっと、スマートにし、産業全体の発展に貢献する」である。またサービスキャッチフレーズを「忙しいビジネスパーソンを、シェアエコサービスの達人に！」とする。

活動報告

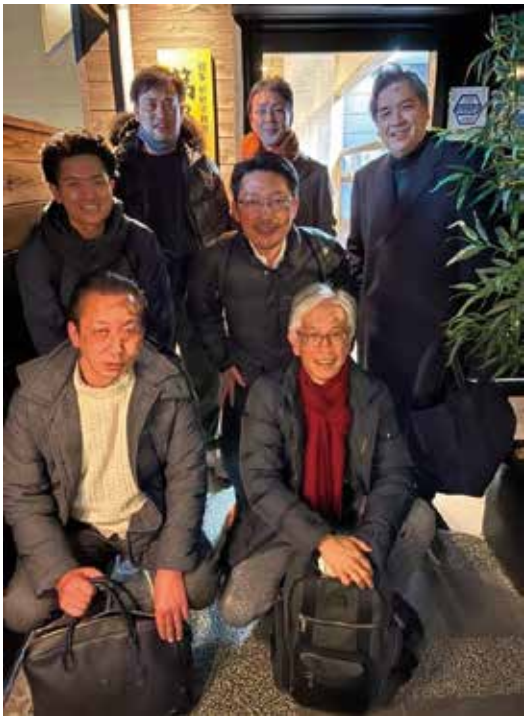
QBS ビジネスプランコンテスト 2021



九大祭起業体験プログラム（QSHOP）

講義風景

ゼミ活動・大学生活



協賛

株式会社みぞえ様

株式会社タカギ様

MIZOE GROUP
みぞえグループ

■株式会社みぞえ
〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-9-20
TEL. 092-715-1451 FAX. 092-715-1452
http://mizoe-corp.co.jp/

takagi

主要事業

園芸散水用品事業

お客様目線での新規提案、また品揃えの豊富さにより、販売シェアは国内トップです。

散水用品シェア No.1

浄水器事業

蛇口とカートリッジが一体になった蛇口一体型浄水器は新築マンションでの採用率は業界トップです。

新築マンション導入率 業界 No.1

株式会社タカギ
本社：福岡県北九州市小倉南区石田南2-4-1
北九州オフィス：北九州市小倉北区京町3-1-1セントシティ9階

MEMO

MEMO

QBS